

本書の刊行に寄せて

ソフトウェア開発者としてのキャリアは、あるいはソフトウェア開発者だけではないのかもしれませんが、流れを渡る「飛び石」のようなものではないかと感じることがあります。プログラミングを始めたばかりで右も左もわからない初心者は、初心者特有のつまずきや悩みがあるでしょうし、ある程度習熟して中級者になれば、それはそれでまた別の景色が見えて、初心者とは異なる悩みが生まれることでしょう。そして、経験を積んだり、技術を身につけたりして新しいステップに進むたびに、それぞれの新しい景色が見えてくるものです。

世の中にはさまざまなトピックについて「初心者」を対象にした「入門書」があふれています。しかし、初心者向けの本を書くのは、それなりに大変です。書籍を執筆するほどその分野に精通した人は、だいたいの場合、自分が初心者のときになにを感じていたのか忘れてしまっていて、初心者がどういふふうにつまづくのか共感できなくなってしまっている人が多いせいだと思います。私も入門書とか書こうとしても書けないタイプですね。それで、タイトルに「入門」と書いてあって、しかし、必ずしも入門に向かない本もたくさん存在することになるのです。下世話な話ですが、タイトルに「入門」と付けると売上が伸びる傾向があるんですって。そういえば、本書もタイトルに「Ruby入門」を含みますね(笑)。

で、本書です。本書は確かに「Ruby入門」という書籍ですが、対象はプログラミング初心者ではありません。「プロを目指す人のための」とあるように、プログラミング初心者を脱出して、次の段階として、職業プログラマになりたい、あるいはすでになっている人でも、プロフェッショナルとして次のステップに進みたいという人が対象になっています。そう言えば、このあたりの層を対象にした本というのは意外と見かけませんね。著者の伊藤さんはRubyの「プロ」としてのキャリアは(Ruby歴20年以上の私に比べれば)あまり長くはありませんが、このような書籍を書くためにはむしろ最適な人材だと思います。実際、私なら簡単に流してしまうところも、丁寧に解説されているところがあり、原稿を読んでいて「ああ、人の気持ちがわかるとはこういうことなんだなあ」と何度も感じました。本書はきっとみなさんが「次のステップ」に進むお役に立つでしょう。

さて最後に、プログラミング言語Rubyの作者として、Rubyについて少し説明しておこうと思います。Rubyはもともと私が趣味として1993年に開発を開始したプログラミング言語です。自分の趣味に合うような言語を作ることが最初にして最大の目標でしたから、Rubyは「初心者向け言語」ではありません。当時から私はプログラミング初心者ではありませんでしたから。ただ、プログラマがRubyを気分良く使えて、プログラミングの楽しい側面に集中できることを目指して設計されました。ですから、単にシンプルでつまずきの少ない言語というよりは、どちらかと言うと、見かけはとっつきやすいけど、機能満載で使っていてワクワクするような言語になっています。

Rubyを使ってワクワクしながら、楽しくプログラミングができて、しかもお金も稼げて、周囲から尊敬されて、幸せな人生を送っている、そんなプログラミングライフを送っているみなさんをお見かけすることができれば、それはRubyの作者にとって、これ以上ない喜びです。

出張中のハンガリー・ブダペストから

2017年9月

まつもと ゆきひろ